

協働って なんですか？

巻頭言



羽賀友信

長岡市国際交流センター長
長岡市市民協働条例検討委員会
委員長

現在の日本は成熟社会と呼ばれ、生活も多様化しているため、課題も複雑になっています。その解決には、様々な専門性を持った活動主体の関わりが重要になってきています。地域を見回すと、地縁コミュニティ(親戚、多世代家族、町内会)の絆が徐々に弱まっており、これに変わるテーマ別のコミュニティ(NPO、広域連携システム)への移行が始まっています。社会状況も右肩下がりであり、税金を基本とした行政による団体自治機能も弱体化しています。行政は公平性を基本としており、財源の縮小もあり、きめ細やかな対応は難しくなっています。一方で寄付に基づく住民自治の必要性が高まっています。これは自由度が高く、ニーズに合わせた対応が可能になります。行政から「してもらおう」体制から、地域は自分で「なんとかする」という積極的な体制が必要になり、これこそが行政と民間が補完しあい地域課題の解決にあたる協働の考えです。

○協働

立場の違う人が互いを認め合い、それぞれのおもいに共感し、必要に応じて相互に補い合いながら、これらのものが持ち味を十分に発揮することにより、まちづくりを行うこと。

○協同

複数の人または団体が、力を合わせて物事を行うこと。共同。「住民が一して地域の振興に努める」「産学一」(大辞泉より)

○共同

複数の人や団体が、同じ目的のために一緒に事を行ったり、同じ条件・資格でかかわったりすること。「一で経営する」「一で利用する」「三社が一する事業」(大辞泉より)

私発の 協働

巻頭言



西脇美智子

朝日酒造(株)文化事業部長
長岡市市民協働条例検討委員会
委員

こんな話をご存知でしょうか？英国ウェストミンスター寺院に残された大司教の死際の言葉です。「私は若い頃から世界を変えたいと考えたが出来なかった。英国なら変えられると考えたがそれも出来なかった。歳をとって自分の住む町を変えようと思ったが、自分の家族さえ変えられなかった。死を前に、もし私自身が変わることで家族を変えられたら世界は、少し変えられたかも知れない。」

誰だって幸せになりたいはずですが、時代の変化は予測も出来ないくらいに激しく、私たちの未来に多様な幸福は果たして約束されているのでしょうか。条例は特効薬ではありません。大司教のように世界を変えようなんて思わなくてよいのです。私という最小の主体が家族のために、近隣の住人、社会、地域に、そして職場で出来る「私」発の協働が大切なのではないのでしょうか？映画『この空の花』にありました。「まだ間にあう…」と。